ニューギニア日食速報 ― 1984年11月23日

大　越　　治

今回の日食は昨年と違い、一般マスコミにはほとんど取り上げられることはなかった。そのため、旅行社が募集したニューギニアツアーは全て不成立となり、各ツアーの申込み者は、唯ひとつ成立していた木村精二氏引きいる自主グループに合流することになった。こうして我々２６名は、11月20日（火）ポートモレスビーに降り立った。

11月21日（水）……９時少し過ぎに下見に出発。昼食用の食料を買いにスーパーに寄っていた人々と合流して、マイクロバス２台でフラに向けて東に走る。ニューギニアの太陽はすでに高く、日射しも強い。ポートモレスビーの町を抜け、３０分少しで舗装が切れ、あとはでこぼこ道が延々と続く。雨期とはいえ、ここ数年雨はほとんどなく、乾燥しているのでほこりがはげしい。後続車は窓を開けていられない。３時間ほどでフラに着く。地図で見るよりずっと大きな村で、ちょうど昼休みの小学生たちに、たちまち取り囲まれた。村を抜けて岬に立つと、白い砂浜と青い海。太陽は水平線からほぼ垂直にのぼる。景色としては抜群だ。しかし、足もとが砂地では赤道儀の設置はむずかしい。また、北側が林で、全天写真には不向きである。昼食を食べ、再びほこりにまみれてホテルに戻った。観測候補地は岬の先か小学校の校庭ということになる。決定はまだだ。

ホテルに戻ってから、木村氏が現地エージェントのブローガン氏に交渉する。つまり、我々は２６名いて各々器材を持つので、バスを３台用意するように、また、出発予定が午前２時だったのを午前１時にするように、という事である。夜間走行は昼より時間がかかるとの判断である。ブローガン氏は車についてはＯＫしたが、出発時刻については、フラに行くのが我々を含めて40名ほどいるので、明日の会議で決定したいとの返事だった。

11月22日（木）……午前中は自由行動。午後は観測にそなえて寝る人が多かった。夜６時からの会議は出発時刻をめぐってもめたが、結局午前１時出発におちついた。外人たちの多くは皆既だけを見物に行き、部分食など気にしていない。下見もろくにしていないようだ。フラに行くのは我々を含めて約６０名。バスは８台である。

11月23日（金）……午前０時過ぎに集合。多少雲はあるが、星がよく見える。午前１時出発。夜は涼しいので窓をしめても大丈夫だ。バスの中からマゼラン雲が見える。しかし、ほとんどバスの中では寝ていたようだった。ドライバーは昼と同じスピードでとばしたらしく、思ったより早く４時にフラに着いた。快晴で星空がすごい。東には黄道光と、のぼってきた南十字・ケンタウルスのα・βが光っている。我々は小学校の校庭で観測するつもりの人が多かったのだが、外人たちが岬の先まで行きたいというので先導して行くことになった。我々の運転手が道に一番く

わしいのだ。結局、岬の先で外人たちはさっさと車を降りてセットを始め、せまい道を後戻りできなくなった我々は、器材を後ろの車に移しかえて校庭に戻った。その間約１時間。空は明るくなり、星の写真をとったり、星で赤道儀をセットする事はできなくなった。

我々２６名は、広い校庭に思い思いに器材をセットし始めた。子供達が出て来て我々を見物しはじめた。日食のため、授業は１時間遅れて始まるのだそうだ。近くに寄っては来るが、じゃまをするようなことはない。うっかり落した物を拾って届けてくれたりする。ダンボール箱にピンホールをあけた日食観測箱を持っている子もいる。

第一接食の２０分前には全員セットを終え、いよいよ観測体制にはいった。雲量は２程度。東の空は晴れわたっている。予定通り上（西）から欠け始めた。垂直にのぼる太陽はぐんぐん欠けていく。あたりは次第にうす暗くなり、日食独特の色彩をおびてきた。雲の心配は全くない。いよいよ第二接食だ。シャドーバンドが東から西に淡く流れる。昨年に比べて淡く幅がせまい。ダイヤモンドリングが終わると、濃紺の空に白いコロナが広がった。上下（東西）に、ハケではいたような流線が、５R⊙以上に長く伸びている。地上は思ったより明るい。赤いプロミネンスが黒い太陽のまわりをとり巻いている。あっという間に上（西）のヘリが明るくなり、第三接食のダイヤモンドリングが輝いた。

約５５秒間の皆既。短かい。が、それだけに忘れられないイメージが我々２６名の心に焼きついた、素晴らしい日食であった。皆のあげる歓声が明るい。感激の涙も見える。しだいに強く照りつける太陽。第四接食後の記念写真を撮り、天候と、我々みんなのために御尽力下さった木村氏に感謝しつつ、再びでこぼこ道をポートモレビーに向かった。

明るい太陽とゆったりした町並み・人情。去年に続いてニューギニアファンが増えたような一週間であった。